

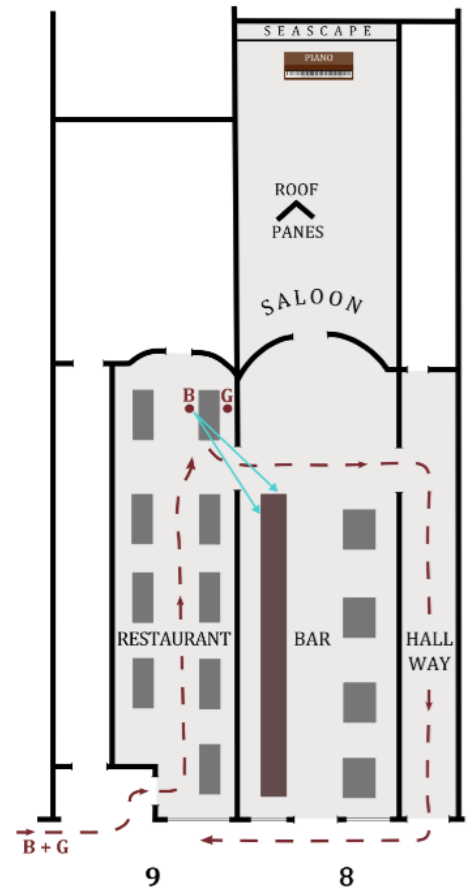
午後 3 時 38 分。リフィー川北岸、オーモンド河岸 8 番と 9 番にある「オーモンド・ホテル」(写真上)<sup>1</sup>の、2 人のバーメイド、青銅色の髪をしたドゥース嬢と<sup>ブロンズ</sup>金色の髪をしたケネディ嬢が、アイルランド「総督の蹄が通るのを聞」く<sup>ゴールド</sup>。ホテルから少し離れた南岸のウェリントン河岸を、妻のために選んだ本、「罪の甘露」を抱えてブルームが歩いている。「四時に」とモリーが言っていたことを(どこで?) 思い出しながら、「どこで食べようか?」と考える。サイモン・デダラスがホテルのバーに入り、ウィスキーの水割りを飲んでいると、レネハンがやって来て、「ボイルンさんがおれを探してた?」(U-Y 11.444)とバーメイドに尋ねるも、まだ来ていないことを知る。エセックス橋(グラタン橋)を渡り、南岸から北岸に来たブルームは、マーサに手紙を書くべく、橋のたもとにあるデイリーの店(オーモンド河岸 1)で便箋と封筒を買う。支払をしているときに、「エセックス橋を派手な帽子[ボイルン]が軽やかに二輪馬車に乗って通るのが見え」(U-Y 11.447)、ブルームは彼の後を付けることにする<sup>3</sup>。



右の見取り図にあるように、ボイルンは 8 番の HALLWAY (玄関ホール) を通って BAR の店内へ、一方のブルームはリッチー・グールドینگ(スティーヴンの叔父)と共に 9 番の RESTAURANT の入り口から建物に入る。ボイルンが酒を飲みながら、レネハンと競馬のアスコット杯の話をしていると、柱時計が 4 時を告げ、彼は早々にバーを去る——ただしその後もエックルズ通り 7 番に向かう、彼を乗せた二輪馬車の音(「チン鈴(Jingle)」)が混入するように鳴りつづけ、「語り手」はボイルンの足取りを追っていることがわかる。

ボイルンと入れ違いに、ベン・ドラードとボブ・カウリー(「おっさんカウリー」)がバーにやって来て、サイモンと共に「別室」(右図の

SALOON) に入り、三人はブルームがすぐ近くにいることを知らないまま、彼が礼服を貸してくれたときの思い出話をする(〈偶然の一致〉)。一方、ブルームが「リンゴ酒」と「レバー・アンド・ベイコン」を食べていると、「恋と戦」を歌うベンを聞き、彼も礼服を貸したときのことを思い出す(別室の会話内容は聞こえないはずだから、これもまた〈偶然の一致〉と言える)(U-Y 11.459)。バーでは、事務弁護士、ジョージ・リド



<sup>1</sup> 本あらすじの写真はいずれも James Joyce Online Notes より(<http://www.jjon.org/joyce-s-environs/ormond>)。同ウェブサイトによれば、オーモンド河岸 9 番の建物がホテルの一部に組み込まれたのは 1906 年以降のことであるという。

<sup>2</sup> 第 10 挿話の第 19 セクションには、「オーモンドホテルの連桁ブラインドの上から、<sup>ゴールド</sup>金と<sup>ブロンズ</sup>青銅との連が、ケネディ嬢の頭とドゥース嬢の頭の連が、眺めて見とれた」とある(U-Y 10.425)。

<sup>3</sup> ただし、ボイルンが乗る「二輪馬車」の音は、サイモンとドゥース嬢の会話の途中に、「チンジャラ、チンジャラ(Jingle)」(U-Y 11.212)と示されていた。

ウェルがやって来て、ドゥース嬢と握手を交わす（この後、彼は彼女を口説こう（≒誘惑）とする）。別室では、サイモンが「**我に現れ**」を歌うように請われ、レストランでは、ブルームに対しリッチーが昔聴いた、オペラ『夢遊病の女』からのテナー曲、「すべて失われし今」の話をする。ブルームは自身とリッチーの境遇が「すべて失われし」であることを考えていると、サイモンが歌い出す。「恋の懐かし甘い歌」(U-Y 11.465)に誘われるままに、マーサとモリーのことに思いを巡らせるブルームは、ふいにこの曲がオペラ『マルタ』の1曲であったことを思い出し、「暗合(Coincidence)。ちょうど書こうとしていた」と思う(U-Y 11.466)。サイモンの歌声の高まりとともに、モリーと初めて会った時のブルームの記憶は、その後の「誘惑」と「魅惑」に満ちた甘い記憶へと移っていき、「サイアポウルド！」とサイモン、ブルーム、そして「マルタ」の恋人、ライオネルの名前が融合し、曲は終わる。

一同がサイモンへの拍手喝采に沸き立つ中、ブルームは正面に座るリッチーに見られないように『フリーマン』紙で隠しながら、マーサへの返事を書く。第4挿話のミリーの手紙や第5挿話のマーサの手紙とは対照的に、ブルームの手紙の内容は断片のみがテキスト上に現れる。マーサの手紙に書かれていた言葉や、今日これまで起きたことを思い出しながら、手紙を綴ったブルームは、最後に「今日はとても悲しい気分です」と書くものの、「悲しいのところは詩的すぎる。音楽のせいだ。音楽には魔力がある」と考える(U-Y 11.475)。そして、カニンガムたちと会うため、バーニー・キアナンの酒場（第12挿話の舞台）に向かおうとすると、別室で今度はベン・ドラードが「**いがぐり頭**」を歌い始めたため、ブルームはしばしその声に耳を澄ませる。しかし、サイモンのときとは異なり、ドラードが歌う曲の歌詞は、〈直接話法〉としてはテキスト上にほとんど現れない。恐らくそれは、熱心に曲を聴きながらも、1798年の反英武装蜂起における悲劇を歌った愛国主義的な内容に心を動かされることはないブルーム——「彼は憎しみを抱かなかつた。／憎しみ。愛。そんなのは名称にすぎない」(U-Y 11.483)——を示唆するのだろう。曲が終わらないうちに、ブルームは立ち去る。「玄関ホール」(上図8番)の方から外に出るブルームの背後では、歌い終わったベンへの喝采と歓声が沸き起こる。

ブルームは郵便局へ向かうために、ホテルを出てから西へと船寄通りを歩くが、便秘ぎみのところにリンゴ酒が効いたのか(U-Y 11.488)、どうも腹の調子がおかしい。盲目の「生若い男」(ピアノの調律師)は、置き忘れた音叉を取りに、先ほどブルームが便箋と封筒を買ったデイリーに店の前を通り、オーモンド・ホテルの前にたどり着く。その頃、ブルームはライアネル・マークスのウインドウにあった色彩画に書かれた「ロバート・エメットの最後の言葉」を眺めながら、通り過ぎる路面電車の騒音を利用して、勢いよく屁を放つ(Done)。

☆以下の地図は、1888～1913年のもの (<http://map.geohive.ie/mapviewer.html>)

